

復讐	2
美人の足秘密の石膏像	14
思い出した顔	18
蠟細工の指	21
パノラマ館の来訪者	27
妖美館の招待状	35
ある靴フェチスト	43
調教師	50
青春放送局	66
第二の誕生日	73
呪われた美貌	81
温泉宿殺人事件	145
酒蔵殺人事件	155
囁く幽霊館	171

難波京介の事件簿  
ブラッディ  
血のマリー……………244 183

評論・随筆篇

異端文学へ——編集者と読者への公開状……………318  
探偵小説とドラマ……………321  
「三つの顔」で旅まわり……………322  
チャンネル千一夜……………322  
一途なもの……………325  
三つの名前……………328  
通った店と客50年 通店客……………329  
（広島・松江・新橋・渋谷）  
ペンネームは変ネーム30……………360  
【解題】小谷さえり……………366

## 凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

## 復讐

「復讐は地獄の料理の中で

最も甘美な食物である」

ウォルター・スコット

### (一)

工務所の独房。

高い窓から秋の日が差込んで床に格子が十字の影をうつしていた。

死刑囚の川野君は、ニコニコと微笑っていた。迫りくる死の恐怖に震く彼を想像して沈鬱な表情で最後の別れを言いに来た僕達三人は、意外にも笑顔で迎えられた。

が、しかし実を云うと、僕達三人の中で、本当に川野君の死を、その表われた表情ほどいたましく思っていたのは、木村君一人だけだったろう。

篠原君は表面だけは、いかにも同情的な表情たる面持であったが、川野君にとつては、いや僕にとつてこそ、それは滑稽極まりないものであった。

青白い端正な容貌で常に自分のポーズを気にかけているスタイリストの篠原君の姿が、その時ほど何にもまして、くだらない、馬鹿げたものに映った事はなかった。

短かい面会の時間は、またたく間に過ぎてしまった。僕は川野君に軽くうなずいた。

「君、大丈夫だよ。もう手配してあるんだからね」

川野君は例えようもない歓気に満面を崩すと朗らかな声で篠原君に云った。

「君、よくやった。巧いものだ、だが今度は君の番だぜ」

あわれな死刑囚は僕の方を向いて、いたざらっ子のようにウインクして見せた。

### (二)

話は半年ほど前にさかのぼる。春の宵の靄霞が立込める京浜国道を一台のオートバイが時速百料かと思われる高速で爆進していた。

ハンドルをとっているのは川野君、後の荷台に股がっているのは篠原君だった。二人はハーレーの新車を駆って湯河原までドライブした帰りであった。

やがて横浜の街の灯が前方にぼーと霞んで見えた。

「横浜だ」川野君が後を向いてどなった。瞬間、オートバイは何か黒い物体を、はね飛ばしていた。慌てて急停車すると、後の荷台から篠原君がとびおりて抱き起した。

川野君が懐中電燈で照すと、若い女であった。

「あつー」篠原君は、女の体を抛り出していた。女は既に死んでいるらしかった。

「病院は……」川野君がカラカラになった喉で、やつとこれだけ云った。

「馬鹿な、どうして運ぶんだ。オートバイには乗せられないぜ。それにもう死んでいる。警察だよ。ここには僕が残っているよう」

篠原君が怒ったようになつた。

(二)

当然川野君は過失致死で取調べられる事になつた。翌日、学校で篠原君から一部始終を聞いた僕と木村君は過

失致死じゃ大した事ないと、たかを括り、かえって、これを退屈しのぎの無駄話のサカナにしたりした。

が、それから数日経つ内に情勢は一変し川野君は殺人犯として逮捕されてしまった。

「そんな馬鹿な」

髭剃り後の真青な木村君が吐き出すように言った。

「二面識もない女を、動機もなく、しかも偶然に轢殺したのが殺人罪かね」

僕は黙って朝刊を渡した。

それに依ると轢殺されたのは横浜のキャバレーのダンサーであり、川野君と交際があり、最近何かトラブルがあったのではないかという事だった。

その晩、女は郊外の町にいる同僚の家に用があつて行き、帰り途であった。

「つまり、川野君は、女がダンサーだと瞬間知りながら、わざと轢殺したという訳さ」

僕はそれが癖のいかにもつまらなそうに、ぼそりと言つた。

「何、何、川野君の下宿を家宅捜査した結果、死んだダンサーからおぼしき手紙が発見されただって。ふうん、川野君がね……」

木村君は、けげんそうな表情で頭を横にふつた。

いかにも堅い法科の学生らしい生真面目な彼を見ると、いつも、きまってる僕は、好んで不良ぶるのだった。

「何しろ、あいつあ色男だからね。女の一人や二人はいただろうよ。僕達はちっとも知らなかったが。それにペチャンコになったヨシ子っていうダンサーだって、めっぽう綺麗だぜ」

僕は、おどけた手つきで新聞の写真版をゆびさした。丸顔で顎のしゃくれた、あちら風の美人だった。

#### (四)

検察庁からは坂本検事以下数名の係官が、この事件を担当したが、この私大出の若い検事の活躍は目ざましい限りであった。

彼は学生時代から探偵小説の真面目な研究者であったせいか、事件の処理についても、凡ゆる場合の凡ゆる可能性を、一見不可能とさえ思われる推理で考察していた。それ故、彼の捜査は往々余りにも空想じみた理論の遊びに偏る事はあったが彼自身は一向に苦にしている様子はなかった。

むしろ、

「僕のような高踏的(彼はこう自讃していた)な捜査方法が巧くいかないという事は、とりも直さず今日の犯罪があまりにも幼稚であるためである。ちよつと頭のいい犯罪者が出ようものなら、今のような通り一ぺんの捜査ではラチがあかなくなるだろう。まあ、そんな素晴らしい犯人など探偵小説に出てくるだけでたくさんではあるがね」と、あたりかまわず高笑するのが常であった。

彼はまた、日頃から、探偵小説のトリックが既に限界に達している事に気がついていた。

犯人が分からないような所謂完全犯罪など今日の発達した捜査技術から到底考えられなかった。物理的・化学的なトリックは既に古い。彼は、そこで次のように考えた。

犯人である事が露見しても罪にならない方法、或は罰せられても軽くて済むような方法、これだけしかないというのだ。前者では、正当防衛や緊急避難に事よせて一見それらしく事を運ぶのであり、後者では過失なりに見せかけて、より重大な犯行を隠すのである。

それ故、彼は「オートバイで人を轢殺した」というこの上もなく単純な事件についてさえ、その背後のより重要な何物かに期待したのであった。

俄然その期待は実現した。

伊勢崎町のキャバレー・ムチヨカなどと、およそ、い

い加減な名前の二流どころのダンサーであった女に大学の隠れた愛人があったとの報告があり、どうやらそれが轢殺した学生に似ているらしいのである。

検事は直にそのキャバレーに赴いた。

ヨシ子と同僚だったダンサー達は、昼だというのに、はれぼったい目をこすりこすり喋り出した。

「ヨシ子さんについてちやあ本当云うと、余り良く知らないんです。何しろ、あの人だったら、こんなキャバレーに置くのは、もつたいない位の美人でしょう」だから、ヨシ子目当のお客も随分とあつたが、どれもこれも通り一ぺんの交渉でしかなかつたらしい。

「だけど、あたし達は、ヨシ子さんの本当の愛人てのは東京のT大学の学生だとちゃんと知っています。ヨシ子さんたら、口が堅くて、めつたにその人の事など話した事はなかつたのですが、最近は、なんでも男が、外に女が出来たららしい素振りなんで、心配だと、ある日、そんなことを言っていた」

変にヒカラビたダンサーが口をとがらして喋つた。

「彼氏、とても美男子ですって」

女達は、はしたなくゲラゲラと笑つた。

次いで検事は川野君の下宿を訪ずれたが留守だつたので、同じ下宿にいる篠原君に会つた。

「川野君って美男子ですか」

若い検事は、人の意表に出るのが好きである。

果して篠原君は突然の意外な質問に暫らくとまどつた様子を示したが、すぐ日頃の如才なさに還り、

「そうですね、まあ、そう云つても決して、川野君は怒らんでしようね」と笑つた。

そう言う篠原君こそ、優型やさかたの美男子であつた。

「川野君は、横浜に誰か知人でもありましたか」

「そうですね、僕は余り知りません。僕達、あまり個人的な事についてはお互い干渉しない方ですから」

篠原君は検事に煙草を勧めた。外国物であつた。

「では、川野君の女友達については」

「そうですね、川野君はその方についてちやあ殊の外、秘密主義でしたので」

「失礼だが貴男には……」

一瞬、篠原君の目がキラリと光つたようだったが検事は知らなかつた。

「そうですね」と要心深く話し始める篠原君の答えはなかつた。

その他、事件当時の状況を、二、三質問した後、検事は、確信に満ちた足どりで引上げた。

二、三日後、検事は裁判所の搜索状をもつて再び川野

## 妖美館の招待状

### 一 プライベート・ルーム

私は黒住四郎から招待状を受けとった。彼が今度、完成した『妖美館』を、ぜひ観てほしいというのである。

彼の名前を御存知の諸君もあるかも知れない。マヌカ人形を作らせたなら、かなりの腕を持つアーチストであるが、それよりも、彼の妻が、黒住京子であると言った一層ピンとくる人もいるだろう。

黒住京子は、猟奇雑誌『モノコ』に、小説を書いているからだ。

速達で到着いた招待状は、その日の午後に来てくれという、あわただしさである。

とにかく私は、黒住家へ時間通りに出向いたのであった。

品川は御殿山。旧岩崎邸の側に彼等の家はある。黒ずんだ陰気な本邸！

『妖美館』というのはあれなんだな。

私は、玄関で案内を乞うた。

四十過ぎだろう。丈のずんぐりした、醜い容貌の、黒住四郎が愛想よく出迎えた。

「これはこれは、淡先生」

先生だなどと呼ばれて、私はちよつとてれ臭く思ったが、彼の妻君と同様、『モノコ』の寄稿家である私を、先生と呼んでくれる人も他にいる事はあるのだから、別にそう呼ばれて不思議だと云うのではない。

「なんでも先生は、物凄いクラブを、秘密に持っているらしいと、もっぱらの噂ですな。私どもの妖美館など、それに較べたら、月とスッポンでしょうが、まあ御覧になって下さい」

黒住はそう言つて、手をもんだ。

控室には、すでに顔なじみが、四、五人来ていた。

雑誌『モノコ』の編集長。私と同じような三文作家のA氏、B氏、それにC氏。あと一人、画かきのD氏がいた。

「これで、おそろいになりましたね。早速妖美館を御覧になって頂きましょう」



黒住は、何が嬉しいのか、ニタニタと笑いながら言った。

「私たち夫婦が、智慧をしぼって造ったんですから……そうそう、妻がいなくて御不審に思っただらう……人があるかも知れませんが」

意味あり気に、黒住は、醜悪な顔に、一瞬ハツとするような表情を見せて一同をジロジロと見廻した。

みんなは、黒住の視線をさけるかのように、変にギョチなく横を向いたり下を見たりした。

私だけが、平気で黒住を見返した。彼の眼に、底知れぬ憎悪の念が燃え上ったのを見た。

## 二 巧妙なる装置

私たちは薄暗い倉の中に入って行った。

「お一人ずつ、ここから順々に中へ入って頂きます。

一つ一つ部屋を抜けて行きますと、それ、その出口に出てまた、もとのここへ帰ってこれます。鬼が出るか、蛇が出るか。一人の方が済むまで、他の人々は、私といっしょに、この部屋で雑談して頂きます」

黒住は倉の入口に面した部屋で、こう言った。

「黒住君、奥さんはどうしたの」

編集長が、いかにもさり気なく聞いた。

「京子ですか。京子なら、妖美館にいますよ。貴方がたをお待ちしてね。それも数人でね……」

黒住は不思議なことを言うと、間髪かんばを入れずに私を指さした。

「淡先生からお願いしましょう」

私はうなずいた。

ハンドルを握るとドアを開けて、次の部屋へ入った。

ほんやり暗い部屋に眼が馴れた。私は危く声を出すところだった。一人の女が、ひっくりかえっていた。

巧みな装置で、この小さな部屋全体が、夕暮近い田舎の山道を現している。

女は、山から帰る農家の娘を示しているのだろう、側には、大きな籠かごがころがっており中には青い草がつまっていた。つまり女は帰る途中、暴漢に襲われて、殺されたものであるという訳なのだろう。無論、倒れているのは人形である。

だが、その人形が、実にどうして精巧なもので、肌の色等、生きた人間そのままであった。

さすがは、マヌカン作りの黒住の手になるだけにそれは見事な人形であった。

私が、人形の顔を覗きこんだ時、突然、どこからともなく、女の怪しい声が、聞えてきた。

私はハツとした。人形の美しい無残な顔は、黒住京子にそっくりだった。悲惨な声が、その半ば開いて、血をにじませた口から聞こえたからである。

「録音なんだ」

そうと解つても、変なものだ。

私は今いちど、人形に目をやって次の部屋へ行った。

ここはまた、がらりと変つた光景で、どこか外国の街であった。大きな人形の男達が立っていた。傍には自動車の模型もある。自動車事故なのだろう。路上に、金髪の女が倒れていた。ドレスが裂けて、処々、白い肌がのぞいている。

その脚は、これまた、京子のに、そっくりな恰好をしていた。耳をすますと、男たちの外国語で喋る声が低く聞えた。

真赤なバラの花が路上で潰されたような凄惨せきさんな中にかあでやかな光景であった。

黒住夫妻の妖美館とは、『恐怖の芸術』の公開だったのである。

しかもモデルは、夫人なのである。

### 三 妖美への憧憬どうけい

数人の京子がいると言ったのは人形のことだったのである。

段々と部屋を進んで行くうちに、私は、その余りにも同曲な趣向に少々うんざりしてきた。いかに巧みに作られていても、所詮しよせん、人形は人形である。こんな物なら、私のクラブの方が数段優まさっている。

次々に展開される恐ろしい光景であったが、私はろくに見向きもせず、どんどんと進んで行った。

私は、黒住四郎とその妻の事を考えていた。発展家の京子は、夫の黒住を完全に無視して多くの男達と交際した。

今日、妖美館に招かれた連中が、その相手と目されている人達であるのは、どんな意味があるのか。

京子の発案であれば、問題は別だ。黒住自身の意思で、私たちを招いたとなると、——私は、ある事を考える。

それに京子はどうしたのだろうか。これは依然として、私の脳中にわだかまっている疑問だった。

私はふたたび念入りに、マヌカンの冷たい肌触はださわりを調

べてゆく。

殆んど一順したらしい。相変らず録音器に仕掛けた、色々の声が、どこからともなく聞えていた。

私は最後とおぼしき薄暗い部屋に来ていた。古井戸の側に、一人の女が、倒れていた。前へ垂れた首を覗くと、恐怖とも満足ともつかぬ不思議な表情を、ありありと、その美しい顔に残していた。

「黒住京子」

私は、こう呟くと、その豊満な体を抱き起こした。瞬間、私は一歩飛びずさった。

死体だ。

本物の京子だったのである。彼女が書く小説のように、自分自身が、あさましくも殺されているのだ！

私は畏を感じた。恐るべき復讐だ。私は戦慄した。私と京子との関係を探知した黒住四郎をまず疑ってみる。

だが下手をすると、私は殺人犯になるのだ。しかも短刀は私の物なのだ。しかし、私の対策はすぐ決った。私の精神を、あれほど湧かしてくれた京子の唇に、軽く接吻すると、私は何喰わぬ顔で出てきた。

編集長、A氏、B氏と順々に妖美館の内部を見て出てくる。だが誰もあの死体が本物だとは気がつかなかったらしい。

#### 四 犯人は誰れか？

私は、黒住の顔に、軽い失望の色が現われているのを冷やかに眺めた。

「いかがでした。皆さん。京子が沢山いたでしょう」

黒住は、そろった処で口を出す。

「あの人形たちに混じって本物の京子がいたのですよ」「へー？」とか「気がつかなかった」とか言うような囁きが起った。

「淡先生はいかがですか。先生には、並々ならぬお世話を頂いた京子ですから、お分かりになったでしょう」

黒住は妙にからんだように言った。

「さあ、じゃ御案内しましょう。妻もさぞかし待っている事でしょう。あの最後の人形があれなんですよ」

一同はぞろぞろと黒住の後について行った。更めて京子のすばらしい美貌を思出してそれぞれ多少の交渉を持った人々は変にそわそわしていた。

私達は、古井戸のある部屋に来た。黒住は、京子を見るなり、いきなり傍へ駆け寄った。

「京子。どうしたんだ」そう言いながら彼は胸の短刀

## ある靴フェチスト

### バタ屋に落ちぶれた男

こんな話があるかと、いぶかしく思われる読者も多からう。だが、本当にあった話なのである。

つい最近、私は北九州のある町に住んでいる大学時代の友人から、手紙をもらった。

「前略、先日は大変失礼しました。僕の奇妙な性癖を知って、さぞやさげすんだ事でしょう……」

こんな書出しで始まり、最後には、「……ぜひぜひ、今一度貴兄にお目にかかりたいと存じます」

と結んであった。

こんな手紙がやがて来るだろうとは、一応予測していたところだったが、その内容が、余りに赤裸々なものを見

て、私は返事を書くのも、うとましくなり、そのまま焼き捨ててしまった。

めらめらと燃える便箋を見ながら、私は二三月前の不思議な思い出を甦えらせていた。

秋の始めであった。

私は会社の部長に従って北九州のある町へ出張した。

この町には、大学で一緒だった友人が居り、学生時代、一度、遊びに来たことがあった。

以来、音信も絶えて十年余り経っている。私は、一日、暇を見て、久振りに旧友の家を訪ねる気になった。

町の様子は昔と随分異っていたが、郊外の方々はさすがに変らず、容易に友人の家は分かった。

大きな邸で、門柱には「湊一郎」と出ていた。この前来た時は、彼の名ではなく、お父さんのが出ていたはずだから、もう亡くなったのかなどと考えた。

私は、玄関に立ってベルを鳴らした。しんと静まりかえった邸に、ベルの涼しい音が響いたが、誰も出てこなかった。

しかも玄関の扉には、鍵がかかっているようだった。

手土産なんか持って来て馬鹿を見たと思った。仕方なく私は、引返えした。

途中で一人のバタ屋に会った。わざと横を向いて、通

り過ぎて行つた恰好は、妙に気になつたので、私は立ち停つて、じつと見ていた。

汚ない洋服を着て、大きな籠かごを負つたバタ屋は、きよろきよろと周りを見廻すと、すたすたと湊君の家の門を入つて行つた。

留守だとわかると、忽ち、空巢あきすに変わるバタ屋がいるのを知つていた私は、急いで近か寄つて行つた。

「何だね、僕はこの家の者だが、屑物くずものはないぜ」

私はバタ屋の後から大声で言つた。ビックリしたように振り返つたバタ屋は、一瞬、とまどつた表情をした。

「あつ、君は湊君じゃないか」

思わず私は叫び声を上げてしまった。

まぎれもなく、かつての友人に違ひなかつた。

「ああ川野君、とうとう、バレてしまつたね。さつきこの道で会つた時、僕は君だつて知つていたんだ」

「何故、呼ばなかつたんだい」

そう言つたものの、私は湊がバタ屋にまで落ちぶれた様子を見ては、それ以上責める訳にはいかなかつた。

「お父さんがお亡なつになつたのかい」

そう聞くのが精一杯だつた。

湊君の父親といふのは、ある炭鉱の持主で、以前はたいへんに豪奢ごうしゃな生活をしていた。

「うん。おやじもおふくろも死んだよ」

湊君は答えたが、私の気の毒なそうな顔を見ると、ニヤニヤと笑い出した。

「まあ、とにかく上つてくれ。こんな恰好を見られたからには仕方がない」

扉を開けると、ズカズカと家の上つて行つた。

### 女の足へ執着

応接室に通された私は二度びっくりした。以前にも増して、堂々たる飾りつけで、バタ屋をやるほど零落れいらくしているとは、どうしても思えなかつた。

小ざっぱりした服装きせうに着服きせうえた湊君は、ウイスキーを片手に入つてきた。

ジョニーウオーカーのブラックであつた。

私は狐きつねにつままれたような気持だつた。

「君の小説、大方拝見しているよ」

いきなり湊君は言つた。

「そうかい。そりゃありがたい。だけど、僕は、異色雑誌にしか載せないぜ」

「お互様さ。川崎四郎という名を知っているかい」

「知っているさ。同業じゃないか。靴フェチストじゃないのかい。あの男の書くのは、皆んな女の靴への憧れだよ」

「その通り。あれが僕のペンネームさ。君のように本名を出す勇気がないもんだからね」

またまた、私は驚いたのである。

私がよく書いているある風俗雑誌はもとより、他の雑誌にも盛んに精力的などこを見せて、小説を発表している川崎四郎が湊君だったとは。

私など、早々、種がつきて、現代物、時代物、果ては外国物と、ひっかき廻しているのに反し、川崎四郎は、終始一貫、女の靴にまつわるアブの世界を描き続けている。た。

「大分驚いたらしいね。川崎四郎が僕だつてことが分かれれば、バタ屋の謎も十分に解けるはずだね」

湊君は、ちよつとてれたような風をしながら、ニタニタした。

「一別以来十年。色々と話したいこともあるが、まずそのことについて話そうか。お互いに猟奇異物の世界に現を抜かしているんだから」

湊君は、ウイスキーのグラスを置くと、膝を乗り出して語り始めた。

彼は幼い頃から女の足については、狂的な愛着心を持つていた。

小学校では、足洗場で、女の子が足を洗うのを、あかずに眺めていたということだった。

その頃、彼の家にいた女中が、真白な形の良い足をしていたのが、彼の心に焼きつけられたせいだと言う。

彼は、その女中の奇麗な足で、顔を踏みつけてもらいたいと秘かに念願していた。夜になると女中の部屋に行き、彼女の布団にもぐり込んで、お話をねだつた。

そしてそのまま眠つたふりをする。女中は彼が、すやすや眠っているのを見ると、連れて行くのを気の毒に思い、自分も彼の横で寝てしまう。

胸をときめかしながら、彼女の眠るのを待って、彼は、くるりと逆さになる。彼女の柔らかな足に顔をくっつけて眠るのである。

ぐつたりと重い足を胸の上に乗せたり、抱いたりした。脚と脚の間に顔をつっ込んで、眠つたこともあった。

ある時は、とうとう女中に分かつてしまった。

だが彼女は、真逆、幼い彼に、そんな変態的な性癖があるとは知らずに、

「坊ちゃんは、なんて寝相が悪いんでしょうね」と笑っただけだった。

その女中も、彼が中学に行くようになると嫁いでしまった。  
彼は、彼女が家に残して行った唯一の片身として古びた下駄を愛した。指の跡が黒々とした赤い鼻緒の下駄を、彼女の足だと思つて愛撫した。

その頃になると彼の体は、はつきりと男性の機能を備えていたから、下駄によつて夢のようなエクスタシーを感ずるようになっていた。そして気持が高ぶつてくると、その下駄をかき抱いた。彼女の足から、にじみ出た脂だと思つと、いとおしさが込み上げ、ベラベラとその下駄の窪みを舐めたりした。

それからだった。湊君が女の履物に変態的な欲望を感ずるようになったのは。

大学に入り、講師のフロイドの仮説を、心理学の講座で聞いた彼は、自己の精神分析をした。

自分が変態性慾者だとはつきり悟つた時、彼は、激しい自己嫌悪に襲われたが、同時に説明のつかない奇妙な喜びをも感じたのであった。

### 驚くべきコレクシオン

つまり湊君は女の足の下になりたいと願うマゾヒストだったのである。女の履物を女性器の象徴として愛したのであった。

この忌しい性癖は、その後結婚しても治らなかつた。北九州のある資産家の娘と縁あつて結ばれたのだが、閨房の彼は、完全なインポテンツだった。

仕方なく彼は、新妻の靴をそつと床に忍ばせて、それを擦りながらようやく目的を達した。だがその妻は聡明だったので、一早く彼の性癖を見抜き、その後は足や靴で、彼を満足させるように努めてくれた。

二人だけの奇妙な夜が繰り返されたが、妻は嫁いで四年と経たぬ中に死んでしまった。

湊君は、お通夜の晩、冷たくなった妻の足を抱いていたという。

彼は、妻の残した靴の凡てを部屋に持ち込んで、毎日、狂おしく愛撫し、脂臭い匂いをかぎまわつた。果ては、街のシヨウインドウで女靴を見ただけで、妖しい昂奮を覚えるのだった。

## 解題

小谷さえり

川野京輔は昭和六（一九三二）年八月二十九日、広島県広島市に生まれた。本名は上野友夫。本籍は埼玉県比企郡宮前村（現・滑川町）だが、大蔵省専売局（のちの日本専売公社）だった父親が広島地方専売局へ転勤となり、広島市段原東浦町へ居を落ち着けてから生まれたため、川野自身は広島県出身としている。

転勤族だった父親について一家揃って引っ越すことが多く、川野自身も昭和二十五（一九五〇）年に中央大学法学部法科へ入学するまで十回に及ぶ転校や転入を繰り返した。

熊本中学校在学中、地元で発行されている雑誌『映画と文学』へ投稿した映画評で賞金を貰い、この頃から映画批評家になりたいという夢を持つようになったという。広島県へ戻ってから転校先の鯉城高等学校（現・広島

県立広島国泰寺高等学校）の有志と「広島高校映画連盟」を結成し、委員長として機関誌『映画タイムス』を発行したり、『ミューズ』や『映画』といった雑誌の編集業務を担当したりと精力的に活動を続けたが、大学進学を機に映画への情熱が冷めたのか映画批評家への道を自ら断念した。

中央大学入学当初は横浜市金沢区富岡に住む銀行員の叔父宅から通学していたが、ほどなくして叔父が福岡へ転勤することになり、知人を介して埼玉県に新しい下宿先を手配してもらい、大学二年生から四年名までの三年間は浦和から神田の校舎へ通っていた。

大学卒業を間近に控えた昭和二十八（一九五三）年、妖しい魅力を持つ性風俗雑誌に興味を持った川野は、就職活動の傍ら『千一夜』や『風俗草紙』、『風俗科学』へ



短い読物を書いては投稿するようになり、やがて常連投稿作家として編集部から原稿依頼を受けるようになる。

当時を思い出しながら、川野は「僕が性風俗雑誌を初めて手にしたのは、浦和の書店でひっそりと売られていた『風俗科学』でね、下宿先で勉強の片手間にフェチ小説や歴史秘話なんかを書いて投稿してみたら採用されて、いつの間にか編集部が原稿を依頼してくるようになったんだ。当時の下宿先は中学校教頭の家で、一階が奥さんの経営する美容院、僕は二階に間借りしていたの。そこで働く美容師見習いの若い娘たちとも仲良くなってね、夕食時間になると、いつも誰が二階へ夕食の膳を運ぶかジャンケンで決めていたんだって。僕は下宿先で夕食を食べることが多く、いつも膳を運んでくれる見習いの娘さんに面白い話をしていたんだ。そしたら、いつの間にか人気者になっちゃったみたい（笑）。しまいには、僕の話がききたくて、娘さんたちが我先にと二階へ夕食を届ける役を争うようになったそうだよ」と筆者に語ってくれた。

また、川野は自著『推理SFドラマの六〇年』（上野友夫名義、六興出版、昭和六十一年二月刊）でも次のように回想している。

〈前略〉わたしは中央大学法学部の法律科だが、司法試験を受けるほどの頑張り屋でもないし、又、その才能もないと諦めていた。そのかわり、せっせと小説を書いては文芸雑誌や娯楽雑誌に投稿し、コントなどを含めるとかなりの作品が活字になっていた。だが小説家として身を立てることの困難さは充分判っていた。

川野自身が編纂した「出版（雑誌・単行本）演劇（脚本・演出）記録」（上野友夫名義『三色の色鉛筆 歌謡詩と私の仕事』「ゼフィルス書房、平成元年十二月発行」収録）を見ると昭和二十八年十月から十二月にかけて雑誌掲載された短編は九作あり、投稿作家としては優良な成績といえるだろう。その中には『別冊宝石』の「一九五三年度懸賞新人二十五人集」に選ばれた事実上のデビュー作「復讐」も含まれている。

なお、管見の限りでは読物や小説で一番早く雑誌掲載された作品は「残虐刑場の女たち」（『風俗草紙』昭和二十八年十月号）と題する歴史読物であり、投稿作品の採用という意味でのデビュー作ならば同作となるが、川野自身も「復讐」をデビュー作としているため、本稿ではあえて異を唱えることはしない。

投稿作品が次々に採用され、『宝石』の懸賞募集にも

[著者] 川野京輔 (かわの・きょうすけ)

1931年、広島県生まれ。本名・上野友夫。53年より『千一夜』や『風俗草紙』へ短編の投稿を始め、同年末には『別冊宝石』の懸賞に本名で応募した「復讐」が掲載され、事実上の作家デビューとなる。中央大学法学部法科卒業後、54年にNHKに入局。広島中央放送局放送部、松江放送局放送部を転任した後、60年に東京勤務となり芸能局へ配属される。広島中央放送局在職中に広島中央局長賞を受賞した。アナウンス室で事務業に従事した時期もあったが、芸能局には合計27年在籍した。91年にNHKを定年退職。日本推理作家協会名誉会員。

[解題] 小谷さえり (こたに・さえり)

1981年、秋田県生まれ。高校卒業後、カー用品店で働きながら声優養成所へ通い、現在は劇団員として地方公演を中心に小劇場の舞台に立つ。

かわの きょうすけたんていししょうせつせん

川野京輔探偵小説選Ⅰ

[論創ミステリ叢書 115]

2018年8月20日 初版第1刷印刷

2018年8月29日 初版第1刷発行

著者 川野京輔

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2018 Kyosuke Kawano, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1737-8